禅における心身について（三十四）　　ブッダ的省察とデカルト的省察（メディテーション）

①　今回は、「省察」の問題に取り組みたいと思います。　「省察」という言葉は、仏教経典にも百回以上用いられている言葉です。代表的なところでは、『遺教経』に次のようにあります。

常自省察不令有失　　書き下し文　**常に自ら省察して**、失すること有らしめざれ

②　「常に自分が省察をして、それを失うことがないようにしなさい」というような意味です。道元禅師も正法眼蔵の中の「八大人覚」の章で、この言葉を大事なこととして引用しています。

③「省察」は、仏教において重要であるわけですが、では、ブッダのなした「省察」はいかなるものなのかという問いが、私たちブッダの教えを学ぶものにとって、極めて重要な問題です。また、「省察」という言葉は「近代」の原点となった西洋哲学においても極めて重要な意味をもっています。本稿では、まずそのことを見ていきましょう。

●近代哲学の祖デカルト（1596 - 1650）

④　デカルトは、「**近代哲学の祖**」と呼ばれる哲学者（かつ数学者）です。なぜそのように呼ばれているかというと、一言でいえば、**人間の「理性」に深い信頼をおき、理性を存分に発揮する方向を明確に打ち出した哲学を創始した**からでしょう。それは、現代にまで続いているような画期的な転換であったと言えるでしょう。

⑤　「デカルト的二元論」「心身二元論」などという言葉も、広く知られています。「心」と「体」とは、「別々なもの」と捉えることもできましょうが、「つながっているもの、深く関連しているもの」という捉え方が、私たち多くの人の物の見方ではないでしょうか。これはデカルトの時代でも全く同じでした。デカルトは、『省察』という本の序文にあたる箇所で次のように記しています。（『省察　情念論』中公クラシックス、六頁）

**⑥　たいていの無信仰者が、…人間の精神が身体とは分かたれたものであること、を信じようとはしない**

⑦　デカルトは、このような四百年前でも現代でも私たちが普通にもっている精神・身体に関する、このような物の見方は不徹底であるとして、この底に潜んでいる問題を、徹底して考え抜こうとしたのです。

⑧　結局、デカルトは、「精神が身体とは別のものであることを証明する」（同書十頁）ことができたと考えるに至るのですが、これがデカルトが「心身二元論の祖」とも呼ばれるゆえんです。この物の見方が正しいかどうかは、大きな問題をはらんでいると思いますが、ともかく、この問題に真剣に徹底して取り組んだことが、「近代」の幕開けに大きく寄与したことは確かであると言えるでしょう。

●デカルトの問題意識　　⑨　デカルトは自身が取り組んだ問題を、『方法序説』『省察』など、実に深い根本の問題を扱いながら、同時にわかりやすい言葉で書き記したことも、画期的なことと思います。

⑩　デカルトは、それまでの哲学や、自分や周りの人の物の見方を、徹底的に疑いぬき、考え抜きました。「当たり前」のこととして**世間に通用していることや、自分でも当たり前と思い込んでいたようなことをも、徹底的に疑い抜いたことが、デカルトの画期的な点**です。

⑪　このような**徹底的に疑い考え抜く姿勢、その取り組み自体がデカルトの哲学の根幹なのです。疑い抜く姿勢が、デカルトの「方法」の中心**なのです。

⑫　ここで、「デカルトの哲学」を受け取る私たちの側に、問題・盲点があります。私たちは、おうおうにして、「デカルトの哲学」を、「できあがったもの」「提示されているもの」として受け取ってしまいがちです。「自分で考え疑い抜く」という「方法」を自分が実践するのでなく、「デカルトの教えた方法」というようなものに頼ってしまいがちです。ここに私たち各自の取り組み、その足元に大問題があるわけです。仏教や禅を学ぶ際にも全く同じ大問題が、私たち各自の足元にあるわけです。

⑬　これは本当に大事なことです。私たちは、ともすると、「流行っているから良いことに違いない」「偉い人が言っているから（例えばお経に書いてあることだから）正しい」「これで世間に通用しているからそれでやっていける」などの次元で生きていることが多いのではないでしょうか。「流行り」や「権威」や「それっぽさ」、この三つをうまく活用してやりくりしていけば、世渡りとしては十分やっていけるかもしれません。ですが、これだけだと、本当の自信や安心はもてないままではないでしょうか。

⑭　心の底から納得しているわけではないのに、「世の中そんなもんさ、これでいい」とすまして生きていては、釈然としない思いがずっと残ってしまうのではないでしょうか。

⑮　この問題に、徹底して取り組もうとしたのが、デカルトの画期的なところです。そして、デカルトは自分自身のその徹底した取り組みを、ラテン語で、一冊の本として執筆しました。その書名が、「Meditationes de prima philosophia」です。日本語訳では、『第一哲学についての省察』です。

●デカルト的省察（メディテーション）

⑯　デカルトのその本では、６つの「Meditatio」が記されています（複数形がMeditationes）が、これが「省察」と訳されているのです。英語だと、**「meditation」（メディテーション）です。デカルトは、「本当に疑って疑って、どこまでも疑わしくない真実をみつけだそうと考え抜く」というような意味で用いています**。

⑰　このような意味での省察を、「デカルト的省察（メディテーション）」と呼ぶとするなら、これは哲学をする人にとって重要なだけでなく、別に哲学者や宗教家ではない普通の人にとっても、人生をしっかり生きようと思ったときには、本当に大事なことなのではないでしょうか？

⑱　『デカルト的省察（メディテーション）』というのは、デカルトより約三世紀後の時代の哲学者のフッサール（一八五九～一九三八）が、その晩年、70代はじめに出した本の題名でもあります。フッサールは、当時の哲学が、「活き活きしたもの」を失ってしまい、細かく分裂・分派して、瑣末な論争にあけくれている現状を嘆き、その原因を次のように述べています。

⑲　**哲学のこうした悲しむべき現状というものは、結局、デカルトのあの省察から発する推進力が、それの根元的な生命力を喪失したことに起因するのではないであろうか**。（『デカルト的省察』中公クラシックス、17頁）

⑳　デカルトの「省察」は、それをやりぬこうとすること自体、「根源的な生命力」に満ちみちています。その生命力は、すべてを「活き活き」とやりぬいていくような「推進力」をもっています。根源的な生命力そのものであるようなデカルト的省察を、喪失してしまっているところに、現代の哲学も、宗教も、私たちの日常生活も、「悲しむべき現状」に陥っている根本の原因ではないでしょうか。フッサールは、その解決策として次のように提案しています。

㉑　**哲学を新たにはじめようとしたデカルトのあの徹底主義を、いまこそ甦らせるべき時期ではないであろうか。　実りある唯一の再生は、まさしくデカルトの省察を甦らせることではないであろうか**。（18頁）

㉒私自身も全く同様に思います。できあいの知識や方法に頼ることは、世渡りをする上では十分ですが、根源的な生命力に満ちた生きがいのある人生を送るためには、どうしてもデカルトが取り組んだような仕方で、私たち各自が取り組もうと決意する必要があるように思います。そうでないと、たとえ仏教や禅を学んだとしても、「ちょっと気持ちが静かになった」「流行っていて評判がいい」程度の、世渡り的な仏教にしかならないように思います。

●西田幾多郎が勧める省察

㉓　近代以降の日本人で、デカルト的省察を最も徹底して行なったのは、西田幾多郎であると思います。西田は、哲学者として真に哲学する道を歩み続けると同時に、禅の修行を徹底して行ないましたが、このこと自身が、「デカルト的省察」の実践と言えます。西田自身が、そのように言っていますし、また人にもそれを勧めています。西田は、４０歳の時に出版した『善の研究』（岩波文庫、60頁）で次のように述べています。

**㉔　今もし真の実在を理解し、天地人生の真面目を知ろうと思うたならば、疑いうるだけ疑って、凡ての人工的仮定を去り、疑うにももはや疑いようのない、直接の知識を本として出立せねばならぬ**。

㉕　実に激しい問題意識です。「世の中、これで通用している」という人工的な次元ですましているだけでは、「真の実在」、具体的には、「自分が今ある」とはどういうことなのか、天地（自然）や人生の真の姿とは何なのか、これを本当に自分で納得することはできません。誰か人（ブッダだろうが祖師だろうが）が言った言葉で適当にやりすごしているのは「真面目」とは程遠い生き方でしょうから、自分自身が「疑いうるだけ疑って」、もはや疑いようのない本（元）へと向かう真摯な探求をする以外ないと思います。

㉖　40歳の時点での西田の探求が、『善の研究』として結晶したわけですが、もちろん西田は生涯にわたり、その探求を続け、74歳の時（亡くなる前の年）に、「デカルト哲学について」という論文を書いています。

㉗　その中で、『善の研究』執筆の時点と変わらない問題意識、すなわち「真実在というものが如何にして我々に求められるか」ということを繰り返し述べ、具体的に取り組む方法を次のように記しています。（274頁）

㉘　それはかつてデカルトが『省察録』において用いた如く、懐疑による自覚である、meditari［省察する］である（野田又夫『デカルト』）。それは徹底的な否定的分析でなければならない。

㉙　この徹底的な「省察」が、人が真に生きる上で本当に大事であることを西田は繰り返し述べています。内心に「疑い」があるのに、それをごまかして、「偉い人が言っているから」「世間で通用しているから」とすましていては、哲学も宗教も日常も浅薄なもので終わってしまうからでしょう。それを打ち破る可能性を開くものは、「懐疑による自覚」です。（『自覚について』岩波文庫、280頁）

㉚その方法は何処までも徹底せる懐疑的自覚でなければならない、詳しくいえば絶対の否定的自覚、自覚的分析でなければならない。我々が真に生死を賭し得る実践も、此から出て来るのである。私はかかる意味において、デカルトの問題と方法とに同意を表するものである。哲学に入るものに、彼の**『省察録』の熟読を勧めたい**。

㉛　デカルト自身の問題意識と、その方法は、本当に大事であり、西田自身がそれを生涯行ない続けましたし、読者にもそれを勧めています。私自身も、西田の勧めに従い、『省察』を熟読し、これまでの仏教や禅を学ぶ姿勢の根本的な誤りを突き付けられました。ブッダも祖師がたも、自分自身で本当に疑いぬき考えぬいたわけですし、それが仏教や禅の方法の根幹であるのに、それを学ぶ私などは、安直に、誰か（ブッダや祖師でない、その後の人たち）が作った「方法」を行ない、疑いの真似ごとのようなことをして、仏教や禅を学び行じているつもりになっていました。これでは、デカルト的省察からも程遠いですし、ましてやブッダ的省察からも程遠く、ただの「世間ではこれで通用している」という世渡り的仏教に陥っていることを反省させられました。

●デカルトの不徹底

㉜デカルトの問題意識、動機、方法が、本当に大事です。西田も、「哲学の方法は何処までもデカルト的でなければならない（297頁）」と、デカルトの方法がどこまでも大事であることを繰り返し述べ、人にも強く勧めています。

㉝　ただ、ここにもまた大問題が潜んでいます。実に微妙な盲点があります。それがどういう問題かといいますと、デカルトの目的意識と方法は、完璧に大事で非の打ちどころがないのですが、デカルト自身が、その自分に課した問題意識と方法を、徹底してやり抜くことができなったという問題です。西田は、先ほど引用した『省察録』の熟読を勧める文章の次の文で、次のように述べています。「しかし私は**彼は遂にその目的と方法に徹底せなかったと考える**ものである。（280頁）」

㉞　何という厳しい問題が、微妙な盲点が、私たちの足元にあるのでしょうか。「すべてが先入観ではないかと真剣に疑い、それひっくり返したところから始める」という「デカルト的省察」を、デカルト自身が徹底して行おうと真剣に努力したことは確かですが、それにもかかわらず、結局は、途中のところで妥協してしまったと西田は見なしているのです。デカルトは、周知のように、「**我思う、ゆえに我あり（コーギトー・エルゴー・スム）**」という自覚に達し、そこから始めるのですが、ここにデカルトの不徹底があることを西田は見抜きます。

㉟　デカルトはすべての物を疑った、天も、地も、精神も、物体も、世界において何物もない、自己というものまでもないのでないかと考えて見た。無論、斯く考える私はある。しかし偉大なる欺瞞者があって常に私を欺いているのでもなかろうか。真の神という如きものもないのではないか。しかし斯くまで疑うにしても、欺かれる私はある。欺瞞者が如何に私を欺くとも、**私が考えるかぎり、私がある、コーギトー・エルゴー・スムの命題に達したのである。而してそこからデカルト哲学が出立したのである。私は此にデカルト哲学の不徹底があるというのである**。（『自覚について』岩波文庫、284頁）

㊱　デカルトの達した「我思う、ゆえに我あり（コギトー・エルゴー・スム）」を不徹底であると見抜いたところが、西田の省察の実に素晴らしいところです。

㊲　読者のみなさんも、自分で考えてほしいのですが、「私が今、何かを考えている（感じている）」というのが、「疑いえない本（元）」に成りえるでしょうか？　例えば、仕事があり起きなければならない冬の朝に、ふとんに入ったままゴロゴロしながらでも、「私は今、ふとんをありのままに感じている、ゆえにそう感じている私はある」などと思うことは可能でしょうが、それは真面目とは程遠く、すべきことをしないでゴロゴロしているだけでしょう。また、坐った姿勢で、「大地（床）を感じている、呼吸を心の目で観じている、ゆえに私はある」などと思う（瞑想する）ことも可能でしょうが、いくらそのように心や理性を働かせても、「歪んだ姿勢」は少しも直らないままでしょう。ここに不徹底があるということは、「いろいろありのままに思っている私は現にある」とか「ありのままに観じている」などの次元に留まっていては、それが不徹底であること自身に気づけないのです。

●身体なき抽象的自己

㊳　「**ありのままに考える」「ありのままに感じる」という次元に留まっているだけでは、届かないものがあるのではないか？　ここまで疑いを徹底したところが、ブッダや祖師がたの徹底したところ**です。

㊴　デカルト的省察の他にブッダ的省察や禅的省察があるのでなく、デカルト的省察を本当に徹底したところが、ブッダや禅の画期的なところだと思います。「我思う、ゆえに我あり」「ありのままに観ずる」までも、「これでよいのか、まずいのでは」と疑い、それを根こそぎひっくり返したところから始まる道に徹したところが、ブッダ的省察の本領だと思います。ここに、「心がありのままに体を感じている」というような二元論、いわゆる心身二元論を超えた道（私たちは本来その道を歩んでいる）が開けていると思います。

㊵　彼（デカルト）は疑い疑った。自己の存在までも疑った。**しかし彼の懐疑の刃（やいば）は論理そのものにまで向わなかった。真の自己否定的自覚に達しなかった。彼の自己は身体なき抽象的自己であったのである**。（293頁）

㊶　「疑っている私はある」「ありのままに見る」などという次元にも、懐疑を向けない限り、寝床でまどろんでいるような次元が、どうしても残ったままだと思います。

㊷　ブッダの時代でも、臨済禅師や道元禅師の時代でも、そして現代でも、「今ありのままを感じる（観ずる）」という次元の省察（瞑想、メディテーション）は大流行りです。これは、ブッダ以前の時代から現代にいたるまで広く実践されていますし、それは「何らかの目的のためのとても有効な方法」です。

㊸　このような次元の省察（瞑想）が極めて有効な方法であることは疑い得ないことでしょうが、その次元に留まっているだけでは、「真の実在を理解し、天地人生の真面目を知ろう」という志を実践するにはいたらないことに気づき、**それをもひっくり返したところから立ち上がる道に生きたのが、ブッダや禅の画期的なところです**。

●デカルトの問題と方法に返って考える　㊹　西田は、「**私はデカルト哲学へ返れというのではない。唯、なお一度デカルトの問題と方法に返って考えて見よというのである**」と述べています。（296頁）

㊺　これは本当に大事な点です。「できあがった（と想定された）デカルトの考え・方法」に返るのでは、それ自身が反デカルト的です。そうでなく、デカルトの問題意識を自分がもって取り組むこと、そしてそれがデカルトの方法を実践することなのです。

㊻　これはもちろん仏教や禅を学じ実践する際にも同じ問題があり、私たちは、ともするとお経に書いてある知識を覚え、意味を理解し、解説したり、あるいは記されている方法に従って、それが仏教や禅の理解・実践だと思っている場合が多いと思います。それはそれで有効な方法であることは確かですが、**ブッダや祖師がたが自分でもって取り組んだその問題意識を、私たち各自がもって取り組むことは、はるかに重要なこと**です。

㊼　デカルト自身も、デカルト的省察を徹底して行なうことはできなかったわけですが、ここに本当に気づきづらい盲点が潜んでいます。これは私たち仏教徒の足元にも潜んでいる盲点です。

㊽　私たちも、ぜひブッダや祖師がたの志を無駄にせぬよう、その志を奮発しようではありませんか。

㊾　ちなみに**私は、「体の姿勢」「正身端坐（端正な坐りの姿勢）」においても、身体技法などをすべて根こそぎひっくり返して初めて、その道が開けることを確信するにいたりました**ので、次回以降、述べていきたいと思います。